

---

# IS -After infinity!-

ジョナサン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

IJのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

I S - A f t e r i n f i n i t y ! -

### 【Zコード】

Z0342BA

### 【作者名】

ジョナサン

### 【あらすじ】

I S本編のある世界から数十年後・・・。

織斑秋良は祖父からI S学園に行くよう勧められる。

しかしそこではクラスメイトが全員女だつたり従兄や従姉に会ったり、旧友?と再会したりと、衝撃的生活が待っていた！

I S使える男の物語が再び幕を開ける！

infinityoo +はじめに（前書き）

はじめに . . .

この小説の前の世界観はこちらが勝手に想像したもので、深くは考えず、似て非なる別物とお考えください。

一夏が誰と結ばれたのかはお答えしかねます。そのため、それに？がる質問も禁止とします。

ヒロインズや千冬姉も同様です。

# infinity +はじめ

まだ進学先を決めていなかつた少年に老人は言った。

「I S 学園に行くといい。きっとお前にとつてかつてない経験が出来る」

老人は少年にある物を渡した。

白銀の、無骨な腕輪。

「入学に必要なものだ。持つて行け」

多分今の時代、何らかの学生は軽く「死ぬ、死ねる」と言つていることだろう。社会人達も、そんなことを呟いているかもしれない。だが・・・

「(・・・死ぬ、死ねる)」

それは多分、俺の今の状況に置かれれば、男性の皆様は、洒落にならないはずだ。

クラスメイトが、全て女子だという。  
1年1組、I S 学園の教室である。

数日前

俺は未だに進学先が見つからないでいた。成績は割と良かった（・・・はず）ので、優良校にも入れた。でも、やはり今の自分よりランクの高いところは途中でついていけなくなることが多い。かといってランクの低いところではその先の就職が辛くなるだけだ。・・・ああー。何で閉校されちまつたんだか、藍越学園。じっちゃんの話によると、相当サービス精神旺盛な学校だつたらしいが。などと文句を言つても始まらない。何とか決めなければ。仲の良い従姉はランクが高い国立学校に行くつて言つてやがつたし。そんな大変な中、ある日俺はじっちゃん・・・俺の祖父から、ある学校に行くように勧められた。EIS学園というらしい。現代最強の兵器、インフィニット・ストラトス。そのパイロットを主に育成する、専門高校と言う奴だ。

始め、「国立じゅんそこー」と言つたのだが、どうしても気になつたので、第一志望に入れた、と。そしたら入れちまつたよ・・・。

少年が去った後、老人は遺影の前に座つた。

「あいつも行くよ。俺たちの学園に」

老人は、今はもうこの世に居ない妻の名を呟いた - - -。

infinite +はじめ（後書き）

いつも、ジョナサンです。前回邪m・・・いえ、ミスによつて前の小説ストップさせました。  
今回こそ、頑張っていきたいです。

回想終了。

とりあえずこの状況は辛い。

女子の目線が一斉に向かってくるのを感じる。

・・・ハツ！？まさか俺、視姦に弱かったのか？そんな変態野郎だつたのか！？俺ツ！？

「いつまで妄想に浸つてやがる」

「ガツ」

バシッ！と、俺の頭に堅い物が降りおろされた。

「いつつー・・・」

「ほら、自分の自己紹介ぐらい自分でやれ」

そう言つた人物を見上げると、俺の見知った顔が。

「と・・・冬也さん！？」

「何を驚いてる。せつせつと自己紹介しろ。あと今は皆堂先生、だ」「俺の従兄、皆堂冬也さんは、そう言つと教壇の後ろに回つた。ダン！」と出席簿を教壇に置く。

どうしてここに冬也さんが、とも思つたが、俺はまた殴られたくなないので、とりあえず自己紹介をする。

「あー、織斑秋良です」

しーん・・・

・・・うつ。言葉が詰まつた。ヤバい。ここで終わつたら陰気な奴だと思われる・・・！

「・・・趣味は、料理みたいなことです、以上」

ここは泥沼になる前に早い目に切り上げておくに限る。俺は以上、と言つと同時に席に着こうと・・・

「キヤーーーー！男子！貴重な男子がつちのクラスにー！」

「しかもカツコいい！」

「・・・ふふ、先生と合わせて薄い本が出来るわね」

女子が歓声を揚げる。・・・どうやら大丈夫だつたよつだ。

「はいはい。HRが終わつた後までそのテンションはとつておけ。

俺はおしとやかな女が好きなんだ」

冬也さんがパンパンと手を鳴らすと一斉に声が止まつた。すげえ。  
いいもとかじきんうでもここまで統制とれないぞ。

「さつさと座れ織斑。後がつかえてる」

「あ、はい」

そそくさと俺は席に座つた。

「じゃあ次」

にしても冬也さんが教師やつてるのは知つてゐるけどまさか此処  
とは・・・。

この調子で行くと・・・いや、そんな上手いことある訳ないか。

「階堂春！元中学三年生！よろしく！」

「それみんな一緒だよー！」

ぐふおつ！？

俺は机に突つ伏した。

従姉まで・・・従姉まで居るとは・・・

確かにここ国立だけどさ。正直恥ずかしい。

「どうした織斑。そんな抜け殻みたいにぶつ倒れて」

冬也さんが若干にやにやしながら言つ。

誰のせいだ誰の。

「まあいいか。じゃあ次」

といつあえずこのHRが終わつたら訳を聞きに行くとしよう。

冬也さんが言うと、後ろの方でカタタ、と席が擦れる音が鳴る。

「エレナ、スノール」

「え・・・」

ガタツ！！

俺はその声と名前に勢いよく振り返ろうとした。

が、その瞬間に俺のこめかみに何か・おそらくチョークのような小さな円筒状の物体・がヒット。

「今は静かにさ？」

指の間にチョークを何本か挟み、笑顔を俺に見せる冬也さん。

「・・・すみません、冬也さん」

俺が謝ると、今度は一本、さつきよりも強く投げてきた。・・・何で？

「学校では皆堂先生、な?・とりあえず」の時間俺から田離すなああ、さいですか。

「・・・以上です」

席に座る小さな音がした。スゲエ氣になる・・・！

結局、俺はその後の自己紹介は殆ど覚えられなかつた。

HR終了直後、俺はあの少女、エレナの方を見たが、もう彼女は去つていた。・・・ふむ。今日HRしかないから、明日確かめるしかない。

俺がそんなことを考えながら、さつきと行こうとしたら、背中にバン！と衝撃が走つた。

「おーっす秋良！一緒に見に行こうぜ！部屋割！」

「は、春。超痛い、手加減しろ超手加減しろ」

「男なんですよ、我慢我慢」

いや、お前がそこいらの男より強いんだよ！

俺はにしし、と笑う従姉、皆堂春へ心の中でツツ「ミミを入れた。

「ところで春、この学校だつたんだな」

「ん？ん。そう。聞くところによるとかなり快適らしいしね！」

国立の高校つて・・・そう言えば俺んちもコイツんちも電車一本で  
行けたな、この学校。さらに遠いのめんじくさいとか何とか言つて  
たから、全寮制のここは理想の場所だろう。

ISを学ぶというオマケ付きだが。

「逆に聞くけどさ、秋良」

「何だ？」

「よく合格できたな。お前の頭じゃ一般は無理だらうなーって試験  
中何度も思つてたのに。」

ペーパーテストと・・・あと、男子はIS知識の実技だっけ？」

失礼な。俺はお前が言つほど頭は悪くない。むしろ成績優良生だ。

「ああ、なんか試験官の人がこれを見た途端目の色変わつてさ。な  
んか実技パスした」

そう言つて俺は制服の左腕の袖をめくる。

「・・・何これ？腕輪？」

そこには俺の肘から手首までのおよそ半分を覆つている、白銀の  
腕輪があつた。

「じつちゃんから貰つたんだけどさ。それ付けてたらいいつて

「おじいさんから、ねえ・・・」

腕を組んで、腕輪を凝視していた春だったが、

「ま、いつか。じゃ、部屋割見に行こ」

そう言つて俺の手を引っ張り、早歩きだした。早歩きだす・・・新  
しい動詞の誕生だ。

「・・・って待て、俺自分で歩けるー。」

そう言つて俺も早歩きだした。

## infinity01 - 1 (後書き)

「」まで予約です。

「」から主人公と「IS学園の補足です。

織斑秋良

おりむらあきら

身長：170cm

髪・黒髪ショートヘア。若干ボサボサ気味。

生い立ち・両親が海外出張で、幼い頃から祖父に育てられる。祖母は病で他界。

趣味・手芸と料理全般。剣道を「やっていた」。

性格・若干妄想することもある普通の男子学生。

IS学園

本編と大きく変わっているところは、  
「少数ではあるが男子の受け入れが数年前始まった」事。

次回辺りに秋良の従兄従姉にあたる皆堂さんとの補足だと思います。

「よっ！秋良、春！」

寮の掲示板で自分の部屋を探していると、後ろから親しげに俺を呼ぶ声が聞こえた。

「お、蒼空」「お、変態」

「誰が変態だ！！」

後ろを春とほぼ同時に振り返ると、俺の友人・・・もと悪友の布仏蒼空が立っていた。

「「めん」「めん。 いまだに修学旅行の覗きの件が忘れらんなくって

やー」

全く悪びれる様子のない春が反撃。

「ぐあつ・・・その話はもう良いだろ・・・」

言いつ返すことが出来ず、昔を掘り返されたことでダメージを受ける蒼空。

「とにかく蒼空。 お前何でここにいる

と、俺が言つと

「へへっ、決まつてんだろ？俺も試験に合格したんだよ！」

「ふーん。 秋良よりよっぽどアホなのにな」

「・・・言つてくれんじゃねーカ」

「しかし、お前実際成績マズかつただろ？」

ちなみに俺の記憶が正しければ、2学期期末終了時点で、蒼空の評定全部3以下だつたはずだ。

「俺は女の園に行くためならどんな手段も惜しまないーーー！」

あー・・・

「（「マイツ馬鹿だ・・・」）」

心の中で、春と同じことを呟いた（多分）、初めての瞬間だった。

「・・・さて、むつしゅ秋良、見つかったあるかー？」

180度逆に向き、蒼空の事を無かった事にしようとする。

「うーん、せによりーた春さん、みつからないあるー」「俺も便乗。

「おいおい、いつからそんな冷たくなつちまつた?おーい」  
聞こえない聞こえない。

ひたすらに自分の名前を探す。

「・・・あ、春。あんた一人部屋じやん!いいなー」

春が指さした先を見ると一つの部屋番号の横に、織斑秋良という文字が。

「気分的に一人暮らしになれるから、良さそつかな」「秋良にや一人部屋は勿体無いと思しきどな」

うるさい変態。

「さてさて、俺は・・・なんだ、男子と3人部屋かよ、テンションヤロウ落ちるな」

ざまあみろ、と心の中で言い倒してやる。

で、春はと・・・

「妥当かなー。女の子同士」

女子の2人部屋だった。

寮の5階以上の部屋に当てられた生徒以外は、基本エレベータの使用が許可されるのだが、初日ということで荷物を担いでいた生徒が多くエレベーターに並んでいたので、俺たちは自分の部屋がある8階まで階段を使うことにした。

どうでもいいが、この寮、ビルみたいなんだよな。

幸い俺と春は基本の生活用具と着替え、そして少々の趣味の品だけを持ってきているので、大して重くはないのだが・・・

「はあ・・・はあ・・・ま、待つてくれよ」

明らかに無駄な物80%の蒼空は、喘ぎながらついてきている。

「もういつそ次の階で置いて行きなさいな、エロ本。ハアハア言わ

れながらついてこられたと氣持ち悪いから。いくら私が心も体も魅

力的だつても、もう警察呼んでるレベルよ」

春がショルダーバッグを片腕で弄びながら言つた。

「勝手に・・・人の・・・荷物の中身・・・決めてんじゃねえ！まあ、否定しないが！ それと・・・どこの魅力的なんだよ！？」

すぐさま反論する蒼空。残念ながら蒼空。春は心はともかく体は十分魅力的だ。主に胸と尻が・・・グハツ！？

「あ、ごめん、なんか手の神様が滑らせなさいって」

ショルダーバッグがハンマーの如く俺の顔面にクリーンヒット。くつ・・・ここが踊り場じやなかつたら大事故になるかもしねなかつた。

そんなこんな言つてこられた8階に到着。

「やー。以外に短かつたねー」

最後の一 段を「えいつ」と軽くジャンプ。

「俺には・・・長かつたけどなつ・・・」

蒼空も何とか上がってきた。荷物が減つて いるのは優しいこの俺が一部持つてやつて いるからだ。感謝はしてほしい。

「それじゃ俺、この部屋だから」

蒼空は階段からすぐ近くのドアを指さした。

「そうか。じゃあな」「じゃあな」

「お前ら・・・もうちよい寂しがるところだろ？」

お前がもうちょっとといい性格してたらな。  
あつさりスルーして行く。

「あ、私ここだわ」

途中で立ち止まり、親指で隣のドアを指さす。

「おう。荷物の整理とか手伝おうか？」

従弟らしく、そんな気の利いたことを言つてやる。

「んー。いや、いいや。相部屋の人も居るっぽいし」

「そうか。じゃあ、また明日」

「ん

そつ返事して春は部屋に入つていつた。

「で、俺の部屋が端っこの方だから困る」

結局廊下の端まで歩いてようやく自分の部屋を見つけた。

「ただいまー・・・」

初めてはいる部屋だから冗談になるが、とりあえず言ひ。しかし当然中には誰もいない。

「・・・俺の部屋だーッ！！」

小さい頃読んだマンガの真似をして試しに叫んでみる。

しかし返事はない。

「・・・一人部屋なんだな、本当に」

柄にもなくそう呟いて、ベッドに身を投げ出す。

「・・・」

冬也さんも居て、春も居て。良かつたのかもしねりない。

ISは女にしか使えない。だからこの学園は男子が圧倒的に少ないせいぜいここに居る男子は全員整備担当。

1クラスに俺含めて1人居るか居ないかだ。そんな女だらけの生活で、知り合いが居るのが救いだ。

「・・・とりあえず荷物の整理、やつちまうか

そう決めて、俺はベッドから跳ね起きた。

そして俺はこの夜、整理に夢中で夕食を食いそびれた。

設定とか

皆堂春

秋良の従姉。春に生まれたから春と名付けられた。  
強い。

身長：168cm

髪型：黒色ショートヘア。

趣味：ファミコン等ゲーム類。つまりゲーム。

生い立ち：秋良と長い付き合い。同じく剣道を「やっていた」。

性格：元気。

皆堂冬也

春の兄。教師。滅茶苦茶強い。

髪型：黒色。若干長め。

性格：何を考えているのかわからないのがクオリティ。

よつと。

俺はほぼ体内時計で目が覚めると同時に跳ね起きた。

毎朝の寝覚めが良い。うん、いい習慣だ。

「さて起きたところで・・・早く飯食おつ」

さつさと着替えて食堂に行こう。滅茶苦茶腹減ってる。

「あ」

部屋を出てさつさと行こうとしたが、向かいの部屋の右側、部屋番号の下に目がいった。

エレナ・スノール。

「・・・向かいの部屋だったのか

・・・左右を見る。誰もいない。

・・・

「ぐふん、と生睡を飲み込み、ドアノブに手を・・・

「秋良ア おはよーせーん！」

「ぐはあっー？」

バシィーン、と背中に強烈な痛みが走る。  
織斑選手、これはたまらずダウン。

「大げさだなー 秋良は」

悶絶する俺に向かつて皆堂春は右手のひらをぶらぶらさせた。

「自分の力の自覚をしろあ・・・」

昨日の夜何も食べていない俺にとってこれはかなりのダメージだ。

「ごめんごめん。ちっちゃいご飯おごるから許して」

俺の痛み（物理）はライス小なのかな。

「にしてもあんた、エレナって子随分気になるのね」

「うん？」

「ほら、昨日からエレナって名前に結構な反応してたじゃない」

「・・・仲の良い知り合いなんだよ」

「へえ～～～？」

楽しそうに俺を見つめる春。

「・・・別にお前の思つてゐるよつたな関係じゃないぞ」「はいはい、そつ言つことにします。で、めしいこめしいこー」  
・・・なんかはぐらかされたような気がする。

しかし、今はとりあえず腹が減った。何か口に入れたい。

軽い速さで走つてゐる春の背を同じくらいの速さで追いかけた。

「あいよ、オムライスお待ち」

俺はオムライスをおばちゃんから受け取ると、朝から天ぷら蕎麦に  
がつつく春の隣に座る。

「・・・朝から天ぷらとか、大丈夫か?」

「ずずずー！ふふあ！ほははひひほへふはひはひほ」  
しかも大盛りにしてやがる。口いっぱいに蕎麦を含んでいて、何を  
言つているんだか。

「さて、俺もいただきますか・・・ん？」

俺は何気なく向こうの方を見た。

高校生に見えない小柄な体型。

アタッショケースを彷彿とさせる背負い鞄。  
容姿に見合わぬほどに長いマフラー。

「・・・」

その瞬間俺はただその少女を見ていた。

「・・・よお！秋・・・ラツ！」

バシーン、と俺の背を平手が襲つた。

その瞬間から、俺が立ちながら後ろを振り向き、「何すんだーー！」  
と、

力の入つた鉄拳を悪友、野仏蒼空の鳩尾に叩き込むのに、  
1秒ほどしかかからなかつた。

教室に入った時から、授業中も、ずっとと考えていた。間違いない。あのときより背は少し高くなってるが、間違いない、俺の知るエレナだ。時たま時間を見つけては後ろを見る。しかし、何で俺に話しかけてこなかつんだろうか。・・・まさかとは思うが、・・・照れてた？いいやいや。たぶんありえな・・・

「起立つつてんだろチョーチップ」

ガン！と、俺の頭に皆堂先生の手刀が叩きつけられた。痛みを感じるよりも早く、反射的に俺は席を立つ。

「はい、タイムロスがあつたから礼はいい、着席」うつ、痛い。視線が痛い。席につくと、冬也さんは

「じゃあクラス代表決めるぞー。まず立候補者起立ー」と言つた。クラス代表。つまり一般高校で言つ委員長に当たる。勿論、俺がそんな面倒くさい役になりたい訳がない。ましてやこの状況で立つ奴なんて・・・

「はい、アシュリー・ブライアント、と」

「よろしくお願ひしますわ」

こういうお嬢様タイプかお調子者だけだ。

「では立候補にあたつて何か一言」

「クラス代表に恥じぬよう、皆様を引っ張つて差し上げます」

ほら、こういう人こそ代表になるべきなんだよ。

「・・・んー」

冬也さんは何か考えているようだ。

「・・・よし、このままじや面白くない。と、言つわけで誰か代表になつてほしいなーつと思つている奴拳手」

「・・・は？」

俺が呆けている間に一斉に女子の手が上がる。

「はい、アサギさん。誰がいい？」

「はい、織斑君が良いと思います」

え。

「私も織斑君に賛成です」

え、え。

「正直織斑君しかないと思つんだよね」

「うん、それしかないよ」

え、え、え。

「兄ちゃん、私も秋良に1票～」

・・・春、覚えてやがれ。

「と、言つわけだ。織斑、立候補しろ」

ええ～・・・・つて冬也さん！妹は「皆堂先生」じゃなくてもいいんすか！？

嫌々起立する俺にクラスが沸く。

「先生」

が、一人の発言により、ぴたり、と空気が止まった。

「・・・何か言つしか無くなるわな、ブライアント」

アシュリーという生徒が、頷く。

「お言葉ですが先生、私は彼、織斑秋良にクラス代表をつとめる器があるとは思えません」

「と、言つと？」

「まず、彼が男であるという事です。工Sに乗ることが出来なければ、5月にあるクラス対抗戦への参加もままなりません」

なるほど、的を射るような的確な指摘。

「次に、彼と私の経験の差です。彼は知るといふによると、一般入試を付け焼き刃でやつと合格した」

付け焼き刃とは失礼な。ちゃんと国英数解けたぜ？

「それに対しても私はアメリカ代表候補生です」

・・・はい？

「最後に。彼にはやる気が感じられません。ならば私がやるしかないでしよう。以上です」

・・・女子が静まり返る。冬也さんも口を開かしている。

「どうですか先生？」

アショリーが自信満々といった表情になる。

言い返せるものなら言い返して見ろ、みたいな。

「・・・言いたいことは、それだけか？」

「はい？」

意外そうな顔をするアショリー。

「よし、ならばその反論を全て押さえて見せよう」

冬也さんがまるでどこかの推理小説の主人公の如き台詞を言い放つた。

・・・どうでも良いですが、俺の意志、忘れてません?

そして、俺が主人公なんですが、一応。

## infinity02 - 1 (後書き)

新キャラの名前はどこかから引っ張つたり自分で考えたりと、苦難します、ジョナサンです。多分マトモにあとがきを書くのはこの小説では初めてだと思います。

さて、俺がお嬢様キャラクターを書くのを苦手だと知っている人は知ってると思います。

ですが、やはり苦手な物は直すべきだと。てなわけで頑張ります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0342ba/>

---

IS -After infinity!-

2012年1月5日18時15分発行